

第3回 自然科学研究機構シンポジウム 「宇宙の核融合・地上の核融合」



本機構主催の第3回目のシンポジウムが2007年3月21日に東京国際フォーラム（東京都千代田区）にて開催された。過去のシンポジウム同様500人以上の参加者で会場が埋め尽くされた。

今回のシンポジウムは「核融合」をキーワードに、核融合科学研究所が中心となり、核融合に関する最先端の研究が紹介された。シンポジウムはバイオリン演奏で華やかに幕開けし、続いて立花隆氏の趣旨説明、志村機構長の挨拶の後、本島核融合科学研究所長の核融合全体に関するオーバービューがあった。

シンポジウムは2部からなる講演とパネルディスカッションから構成され

た。第1部、「宇宙の核融合」では桜井隆氏（国立天文台）、鈴木洋一郎氏（東大宇宙線研究所）、加藤隆子氏（核融合研）の3人の講師がそれぞれ宇宙における核融合反応の様子とそれをプローブする様々な手法についての話をされた。

お昼の休憩後、第2部の「地上の核融合」が始まった。ここでは、核融合研の山田弘司氏、竹入康彦氏、柳長門氏からそれぞれ一億度のプラズマをどのように制御し、加熱するか、またそのための超電導技術についての講演があった。その後、高部英明氏（阪大レーザー研）によるレーザー核融合研究の話を挟んで、最後に佐藤元泰氏（核融合研）の核融合研究で得られた技術の

応用についての話があった。

パネルディスカッションは、「一万年続く高度文明は存在するか？」と題して、NHKの葛西聖司アナウンサーの司会で、立花隆氏、漫画家の松本零士氏、海部宣男前国立天文台長と本島修核融合科学研究所長をパネリストとして行われた。

前回に引き続き今回もほとんど途中で席を立つ参加者もなく、朝10時から夕方5時過ぎまで終始大盛況であった。シンポジウムのより詳細なことは「SCI(サイ)」<http://sci.gr.jp/project/nins03/>に紹介されているので参照されたい。（松本吉泰 記）

分子研シンポジウム2007

標記シンポジウムが6月8日午後～9日午前に開催されました。これは9日午後のオープンハウスに連動させた新企画です。講師は以下のとおりで、分子研OB、総研大OBを中心に4大研究領域から推薦された先生方です。

田中 健太郎（名大理）「バイオ分子を使って金属錯体の機能をプログラムする」

北川 宏（九大理）「錯体プロトニクス」

芳賀 正明（中央大理工）「表面でのナノ構造構築と機能発現」

森 初果（東大物性研）「分子性導体の新展開—超伝導から非線形伝導まで」

今井 隆志（立命館大情報理工）「分子

液体論でみるタンパク質の構造と機能における水の働き」

光武 亜代理（慶應大理工）「計算機シミュレーションによる小タンパク質の巻き戻り機構へのアプローチ」

下條 竜夫（兵庫県立大理）「レーザーおよびシンクロトロン放射光による分子の光解離ダイナミクス」

富永 圭介（神戸大分子フォト）「超短パルスレーザー分光による凝縮相における反応と緩和のダイナミクス」

所外からは学部生、大学院生、研究者と幅広く参加していただきました。皆さんに総研大への進学や共同研究の提案・申請を促すことを意図して、そ

れぞれの講演の最初に分子研との関わりを紹介していただきました。各講師の分子研や総研大への愛着を感じる話ばかりで、我々にとっても大いに励まされるものでした。所内からは特に総研大生の参加を促し、8日夕方の懇親会の場で所外の学生との交流を深めていただくようにしました。参加者は全体で60名～70名に達しました。参加者の皆さんには分子科学の多様性ととともに、その基礎を支えている分子研の存在意義を感じ取っていただけたものと思います。お忙しい中をご協力いただいた講師の先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

（小杉信博 記）